

1998年8月31日発行

新宿ダンボール村通信

第11号



底辺下層に組み込まれた労働者が たどる最下層の還流点

その4

笠井 和明

路上からの考察

IV、産業革命と貧民窟の一般化

「世が文明に進み、工場の数が殖へ、機械仕事が多くなると、自然に婦女子の仕事も増加する様になるが、斯なると下層人民は安樂になるかと言ふに、決して然らず。婦女が工場に働きて夫の活計を助くる故、世帯持か樂になるかと思ふやうだが、却って一家の活計は困難になる傾きあり。是は文明開化の弊害にして、労働者は働きば働くだけ困難になると云うありさまである。」（「労働世界」第16号明治31年）

鉄道、紡績、鉱山、重工業など、資本制企業が勃興するのが明治20年代初頭である。鉄道資本は明治

33年には三年前の約9.2倍、紡績資本は約8.2倍、鉱山資本は約3.7倍に増殖した。無論これらは自然成長的なものではなく、工場拡大政策に象徴される明治国家の富国強兵路線による「上からの資本主義化」によるものであることは広く知られている。そして、わが国は、産業革命を梃に、対外的には日清戦争、日露戦争を経、朝鮮、中国、アジア諸国からの利権を奪い、帝国主義的大国への基礎を着々と築きあげて行く。

これら飛躍的な日本の資本主義化、帝国主義化の礎になったものこそ、過酷な労働ときびしい階層制的低賃金体系による労働者の酷使であったことも、これまた広く知られていることである。

「歳末の十二月になると、上野駅に東北から列車が着くたびに、少女を引連れてくる集団が目立つようになった。“先輩とも覺しき男が、二、三人付き添うて、六歳から二十歳前後の少女を、十五、六人も連れ”て降りる。この少女たちの行く先は、工女、娼妓とほとんど決まったようなもの。あるいは単身の少女を、上野の駅で誘拐する倅夫もあらわれたと東京日日新聞が伝えた。」（「炎の女」永畑道子著より）

紡績産業による農村から大量に狩り出された婦女子労働者の酷使は「女工哀史」に見る通りである。

汽車は炭ひく せっちゃん虫や尾ひく 川筋下罪人はスラを曳く

と謳われた炭鉱労働の過酷さも言語を絶する。三池や幌内など官営炭鉱による囚人労働。高島炭鉱に象徴される納屋制度など命すら保障しない使役制度、そして納屋頭による極度のピンはね、リンチなどなど。

「一時が万事、人と我と区別せん。共同生活ですけん、人のことが自分のことと同じ苦痛になりますたい。病気でもしてみなさい。出たり入ったり行ったり来たり。どこの誰が病気やらわからんごと氣をつかう。貧乏といやこの上なく貧乏して、みんあばからしい三反田をなくして流れこんどる。誰も根っからの炭鉱もんじやない。ここまで来るには、いうにいわれんつらい道を誰でも踏んで来とる。県ちがいのもんばかりたい。それがどうしてあんな深い気持ちでつきおうとったんじやろうか、今でも思うたいの」（「奈落の神々」森崎和江著から）

下罪人視する差別と過酷な労働の中でも鉱夫たちは「働く食われん」と身を粉にしながら、貧乏人同士のつながりだけを頼りに生き抜いて来た。

一般に言う「プロレタリアートの形成過程」や「日本の資本主義化」の歴史過程というものは、決して平面的に行なわれた訳ではなく、その当時に生きる個人史にとっては実にドラステックに行なわれた。「働く食われん」という切実さと貧困と絶望こそが、下層の民が生きぬく唯一の原動力であり、

「東京市内の娼婦に関する調査」(東京市社会局発行・大正10年)・東京都立中央図書館蔵より



その切実な必死さをまんまとかすめ取った者こそ、当時の為政者達であり、それが日本の資本主義化の内実であった。

資本主義化は農村を破壊し、都市をも破壊し、変貌させた。好むと好まざると、その荒波の中に民衆は組み込まれて行く。

私が綴り続けてきた都市に目を向けてみよう。

「けだし東京市は三百年継続せる都市であるが、また地方人の来往によって膨脹しつつある植民地である。外国観光団を以て殷賑を極めている帝国ホテルの都市であるとともに、浮浪人の彷徨している木賃宿の都市である。伊勢商人または近江商人らが実

民営工場・男女別労働者数（1882年12月）

	工場数	労 働 者 数			1工場 当り労 働者数		
		合 計	女	男			
織 縫 工 業	製 絲	1,068	37,452	27,702	2,755	6,995	35.0
	綿 絲 紡 織	27	1,363	785	472	106	50.5
	そ の 他〔註〕	190	6,808	4,359	1,283	1,166	35.8
	小 計	1,285	45,623	32,846	4,510	8,267	35.5
食 料 品 工 業	24	229	33	196		9.6	
化 学 工 業	459	7,459	2,069	4,343	1,047	16.3	
金 属 機 械 工 業	128	3,381	117	2,988	276	26.4	
そ の 他 工 業	114	1,916	231	1,510	175	16.8	
鉱業及び精錬業	23	2,444	239	2,107	98	10.6	
合 計	2,033	61,052	35,535	15,654	9,863	30.0	

〔備考〕 第4回『日本帝国統計年鑑』による、工場名のあるものについての調査。隅谷三吉著『日本貨労歴史論』(東京大学出版会・1955年刊)より重引。

〔註〕「その他」の中に織物が含まれている。その詳細は次の通り。工場数=142、労働者数=5078(女=3647、男=574、15歳以下=857)

力を占めているが、越後信濃の農民原は農家の余業を以て押し寄せており出稼ぎ人の都市である。」
(横山源之助 明治45年「下級労働社会的一大矛盾」)

『東京市における地方人の在住数を仔細に駆せば、東京史総人口の過半は、あるいは地方人なるやも知れない……。この多数人員の中、巨費を提げて来往している者もあるであろうが、大半は地方中流者または中流以下の生活者であるのは無論である。すなわちあるいは職人の群れに入り、あるいは工場職工となり、あるいは普通労働者となり、または木賃部落に入りて、いわゆる「浮浪階級の人」となるのである。』(同上)

今日の感覚では「普通労働者」と問えば「サラリーマン」と答えが出そうだが、当時の「普通労働者」とは、今で言う日雇肉体労働者の事である。

産業勃興と共に、東京や、地方都市には、農村部などで暮らしていく人々が押し寄せてきた。都市に産業や、口いれ稼業が確としてなかった時代なら、これらの人々は貧民窟で雑業を営むくらいしか生きる手段がなかったが、さにあらぬ時代、

これらの人々は次々と膨大なる都市下層を形成していく。

横山は東京の下層社会25年の変化を、「貧街十五年間の移動」(明治45年)に書き表わしている。

『…十数年前までは、東京の貧民窟といえば、「万年町」「鮫ヶ橋」「新網」の三ヶ處にトドメを指したものだが今はそうでない、比較的市の中央を離れて、本所、深川の場末に移った。豊島、葛飾、荒原等の部落に櫛縫の世界は形作られている』

「本所、深川の場末は、各種工業の勃興とともに、工場職工を始め、日稼ぎ人足等の群衆甚だしく、いわゆる労働者の霜枯れ月に入れば、一日二千名以上の労働者は、周旋者の手を経て、地方鉱山に飛散する。かくの如きは、本所、深川の場末にあらざれば、見られない図である。」

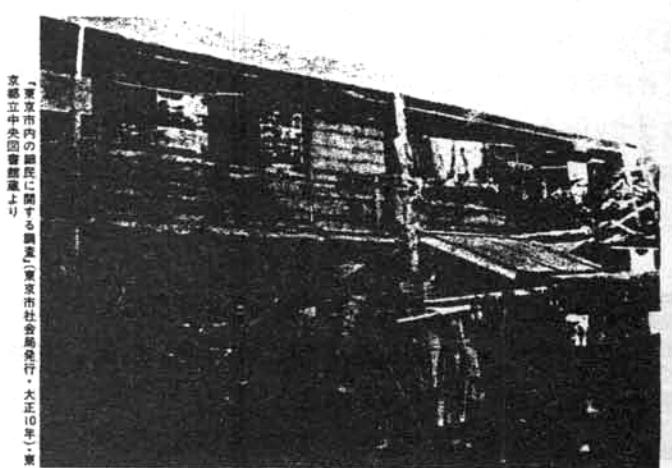
「当時貧民に注目せる者は…、職業としては、まずこの人力車夫を見たのであった。次いで日稼ぎ人足は、今日の如く工場人足寡なく、車力人足を筆頭として、手伝い人足、道路人足、土方人足の類は多数を占めていた。で、今日もワラジ稼業である日稼ぎ人足が大多数を占めているのは依然として変わらないが、工場附属の人足が著しく増殖して来た。」かつての貧民窟は社会外の異端の社会と考えられて来た。文明開化の裏に広がるその悲惨さ、みじめさに、好奇心旺盛な新聞記者などが群がり、その観察記録をこぞって新聞、雑誌に発表してきた。確かに明治20年代までの貧民窟は、当時においては一般化され得ない極限的な「不幸」の産物であり、その意味では特殊かつ過渡的な世界であった。が、産業革命を契機に、都市や農村で絶対的貧困を強制され続けていた民衆が、食い扶持を求め全国的な規模での流動化(もちろん部分的、段階的

なもので農村に止まる部分は圧倒的多数であるが) が始まるや否や、貧民窟に象徴される都市下層社会は、都市において膨張し、拡散し、異端な社会から、より都市下層の一般的な社会となって行く。いうなれば旧来の貧民窟は一般化の中で解体、分化されて行く運命を辿った。そして、膨大となった都市下層民は、拡散した都市の中の貧民集住地域に住みながら、それぞれの生業を見つけて行くこととなる。

一般化される中で、都市は従来のままの貧民窟の姿を許さない。市街地の区画整理も行なわれ、同時に種々の取締も行なわれ、特殊学校なども建設され「檻樓を纏っている小供が、前後左右に旁午してい」た従来の万年町の光景が「今は普通の市街と何等の相違がなくなった」(同上)と記されているよう、従来の貧民窟がこの時代大きな変貌を遂げていったことがうかがえる。

この一般化は、都市の構成員の中に下層が組み込まれて行く過程である。伝統的な屑拾いが、都市産業末端に組み込まれ、また、廃品回収業としてしがない自営業者へと発展していく過程であり、下足直しや、洋傘直しが、補助的な労働としての内職へと発展していく過程であり、ワラジ稼業が日雇労務者や炭鉱労働者、工場での不熟練末端労働者、熟練労働者へと分化していく過程であり、芸人が、盛り場や花街へと本格的に流れ行く過程である。特殊で過渡的な貧民窟が近代都市形成に伴い、都市の下層に広く、一般的に広がって行く過程をこの時期辿るのであった。共同長屋、百件長屋、普通長屋の出現、そして種々の社会事業、および公的宿泊所や職業紹介所の出現は、その象徴的な出来事であったろう。

かつて、農村から都市への流入に対し、都市の側は関心さえもたず、いうなれば、放ったらかしの態度を取り続けてきた。その結果が貧民窟の独自的な発展で



あった訳であるが、都市工業の発展と共に、潮の如く押し寄せる地方人に対しては、従来のように振る舞う訳にもいかず、都市計画的、労務対策的にどこまで認識していたかは分からぬが、「板で一室を仕切ってある」妻帯者には便利この上ない共同長屋(家賃は日掛けで木賃宿と変わらぬものの)が深川、本所など新興工業地帯に多く作られ、単身者用には民間や市営の労働宿泊所(木賃宿の半額の家賃であったという)が浅草、芝などに作られた。

あらたな貧民窟=都市下層集住地が、長屋と共に、下谷、浅草、本所、深川や、その周辺の入谷、日暮里、巣鴨、千住、大塚、はてまた新宿、豊島、葛飾などの郊外にも瞬く間に増殖して行ったのである。

しかし、これら都市部に増殖した都市下層社会から、ストレートに本工たる工場熟練労働者が排出された訳ではない。農村からの流入者は、ほとんどすべて不熟練労働者であり、青年期をすぎたこれらの人々に新たな技能を修得させるのは困難であったからである。熟練した職工と、工場の人夫、建築土木の人夫、炭坑夫などでは、同じ賃金労働者でありながら、その身分的な格差は甚だし

く、労働条件もまた劣悪で、すなわち、不安定な日稼ぎのレベルを脱することはなかった。そういう「普通労働」に農村からの流入者は必然的に組み込まれていった。都市下層社会から工場熟練労働者が排出されるのは、次世代の子息の時代を待たなければならぬ。

社会保障制度がない時代、社会福祉という概念すらなかった時代、時代の仕組みで社会の下層に組み込まれた人々は、その日々の過酷な生活の中から実態として自らの生きる糧、そして権利を勝ち取らなければならなかつた。一般的に言われるよう貧民社会、窮乏層の社会にはたたかいがなかつたなどとは決して言えない。大きく組織されたたたかいは、それは少なかつたかもしれない。けれど、そこに住む人々が必死に生きる姿は、まさにたたかいに等しい営為であったと思う。

もちろん、その個々のたたかいが大きく組織された時、また、ひょんなことで何等かのきっかけが生じた時、いかなる社会的な力を發揮するのかもまた我々が歴史上知るところである（明治38年日比谷焼

きうち事件、明治40年足尾銅山暴動など）。下層社会の人々はこの時代、主要には、生産過程における組合運動として、自らの姿を歴史上にさらした。それは、そこに生きるための切っ先があったからに他ならない。労働運動の歴史を紐解いてみれば分かる事だが、戦前戦後を通して、労働者の中で下部として位置付けられた人々の層や産業から、運動の発端というのは常に起り続けている。炭鉱労働者しかりであり、紡績産業の女工しかりであり、朝鮮、中国人の土木労働者しかりである。水平社一被差別部落のたたかいなどもまた、その文脈からはみ出る事はない。過酷な日々の生活や、社会的な差別を一身に受け、困窮の淵に立たされ続けている人々は、一見社会が保護しなければならない同情的な立場に置かれているように見えるが、果たしてそれは、社会の思い上がりでしかないことを歴史が証明している。整理された理論的な政治意識はないかもしれないが、貧乏人には貧乏人が作るありのままの連帯意識は確実にあり、発火点さえありさえすれば、それを武器にする機会などいくらでもあったのである。

実際、都市下層社会は保護すべき対象であるとは考えられていなかった。そもそも戦前の貧困対策＝救貧思想は、これら下層社会の諸矛盾が社会問題化して始めて開化されたよう、極めて治安対策的な色合いを濃くしたものである。明治7年制定の「恤救規則」は、「人民相互の情誼」を第一とし、公的救済義務主義を取らず、実務においてもきびしく救済対象を制限し、明治23年の窮民救助法案の帝国議会の論議においても、惰眠育成論、自由放

「紹民」の分布（明治41年）

「紹民」	概数	当該地区人口	当該地区人口に占める割合%
麹町区	不明	56,969	—
神田区	不明	128,593	—
日本橋区	不明	110,703	—
京橋区	不明	124,400	—
芝江区	3,731	136,256	2.7
麻布区	2,622	65,876	4.0
赤坂区	500	51,321	1.0
四谷区	5,458	41,535	13.1
牛込区	1,200	89,288	1.3
小石川区	18,672	94,407	19.8
本郷区	1,398	94,823	1.5
下谷区	36,073	125,320	28.8
浅草区	69,869	185,621	37.6
本所区	35,000	163,909	21.4
深川区	30,213	119,098	25.4
合計	205,026	1,626,103 (水面人口を含む)	12.6

出典 「東京市の紹民概数」(『慈善』第三篇第二号)。人口は、明治41年「東京市勢調査」による。

備考 鉴町区から京橋区の4区は不明であるが、それほど大きな数値ではなかったと思われる。

任論などの反対にあい廃案となるなど「貧困は個人の責任である」というどっかの都知事のような迷妄が大手を振るって生きていた時代である。昭和期に入り、ようやく「救護法」というものが出来たが、これとて救済の対象を極貧者に限定した制限扶助主義的な法でしかなかった。これら上からのお情けにすがるほど（すがりたくともすがれぬ実態であったようだが）圧倒的多数の下層民は、慈愛の対象としての己を拒否したのであった。

明治期後半から大正期にかけては、貧民窟が一般化し、解体、分化の道程を辿る時期である。都市下層社会は拡散しながら、この国の仕組みとして、その底辺に自然発的にどっかりと座り込むこととなる。その慢性的な貧困を暴力的に利用しながら、産業は勃興し、国は栄えた。資本主義下における「寄せ場」としての都市は、こうやって形成されてきたのである。特定の地域ではなく、都市そのものが、ごった煮の「寄せ場」だったのである。

「長屋一戸の家賃が現今は二円四十銭でこれを日掛けにして、日に八銭づつ差配が取り立てに回つてゐる。が、この一日八銭の家賃を満足に仕払つてゐる者は二三戸を数ふるほみで、中には一ヶ月五六回も払ひ込むに過ぎぬのがある。差配はこうした家族に対して喧嘩腰で日々噛みつくやうに催促する。店立もする、警察署に説諭願もする、併しどんなにされても此処を出ては行場がないのだから渠等は踏まれても蹴られても動かうとはしない。飯を炊くに薪炭を用ひずに、ボール箱や巻煙草の空箱や新聞紙などを拾つて来て、それを燃料にしてゐる家がある。火事場のやうなキナ臭い匂が一廓を漂ふよのはそれだ。

飯代の無い場合はふかし芋や焼き芋で凌ぐ、それさへ出来ぬ場合は甘藷屋から甘芋の両端のきりッぱじを買ってきて食ふこのきりッぱじは豚の飼料になるものなのだ。

頑是無い子供達が飢ゑて食物を強請るので殴りつけて叱りとばして置いて、亭主の法被一枚を女房が典物に駆けて行くそして得た十五銭を直ぐ米と味噌に代へて来る。」（「変装探訪世態の様々」大正三年、和久政太郎）これは下谷山伏町にある48件長屋の大正初期のルポ物の記事であるが、松原の描いた20年前の光景は、大正時代になろうとも何ら変わりはない。この部落の住人の職業は、車夫、肩屋、古物商、按摩師、袋張り、古下駄屋、鳶職などなど。多少の変化がうかがえるのは「工場の夜業に通ふ者には深夜十二時に交代するがあつて、深夜にあっても一廓には仕事から帰る者仕事に出る者と出入りが絶え無い」点くらいか。そこにあるものは、困窮した都市下層民の生きるための暮らしであり、生業である。つまり、貧民窟の一般化とは、このような暮らししが特定された地域のみならず、各所に拡散したということであり、暮らし向きが決して良くなつた訳ではない。共同長屋にしたところ、居住環境は以前よりは多少は良くなつたであろうが、それに伴い、家賃は上がり、また、都市産業の基底部に組み込まれることによって、従来からの苦難に加え、失業であるとか、景気循環であるとか、資本主義的な諸矛盾にもすぐさま組み込まれることとなり、不安定な生活基盤は何等変わりがないどころか、ますます不安定な生活を余儀なくされた。そして、時代と共に都市下層社会は様々な貧困形態へと分化していく。

特異で過渡的な貧民窟から社会に組み込まれた都市下層への変遷は、その極限的な貧困と、それを突破せんとするバイタリティという二面性をますます内抱しながら、都市における底辺下層を形づくつて行ったのである。

(つづく)



〈新宿西口〉

新宿写真館

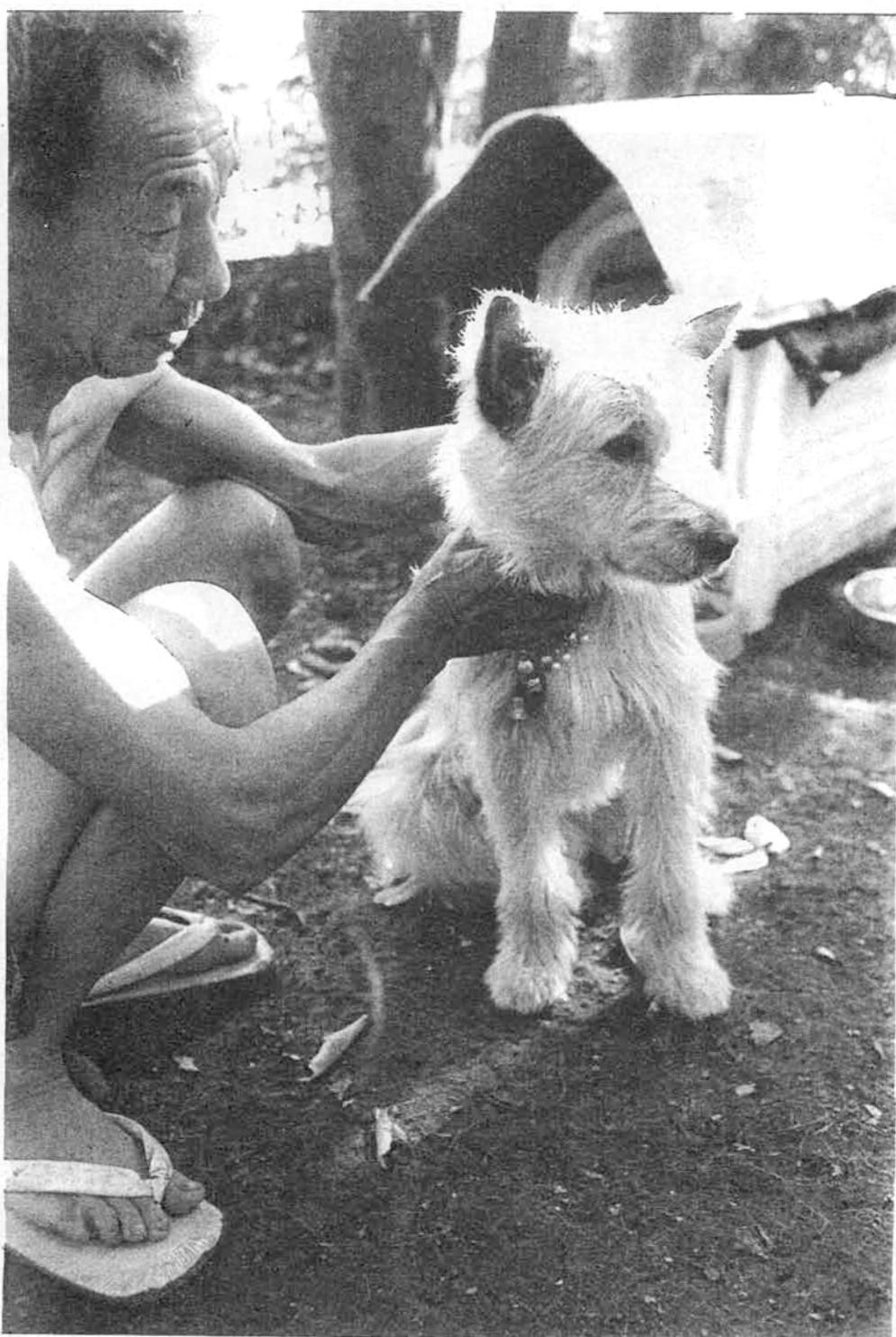
No. V

写真・おかだともこ



〈新宿西口〉

「お前さん、写真はなあ 人の眼を撮るんだ！
じいの眼をよく見ろ！ 今日一日、どんな日
だったかすぐ分かる」
と言わされたことがあったっけ……。

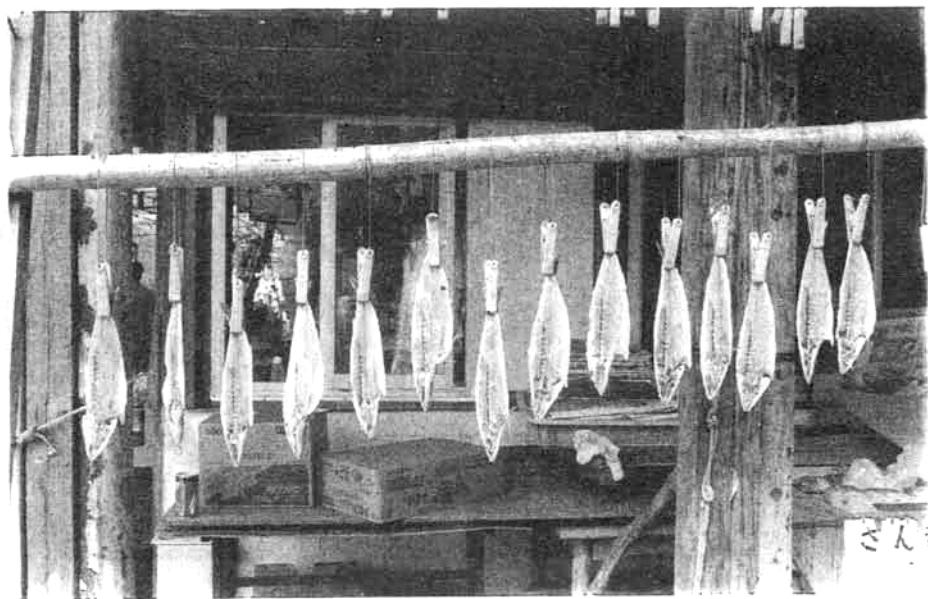


〈上野公園〉

残暑お見舞い申し上げます



〈府中〉



〈伊豆 下田〉

第5回新宿夏祭りが

今回の夏祭りは、前日の追悼式を引き継ぐ形で、私や多くの仲間達にあつただろ。想え巴、今年、2月7日のダンボール村の火災が、記憶に新しい。4人の仲間の生命を奪つた。あの現実の中で、私も、焼けて病院に運ばれて、私と会つてから数日して息をひきとつた中村さん、相内夫妻、下谷さん、そしてこの一年間、路上で、病院で亡くなつていった仲間達。今回の夏祭りを、みんなきつと喜んでくれたと想つている。

ダンボール村がなくなつても、大切なものはなくならない。多くの仲間が寮に入り、そして他の路上にちらばつた。しかしこの日、新宿だけではなく都内からも、多くの仲間が、この祭りに集まつたのだから。

これまで、仲間達の大きな力で、祭りだけでなく、メーデーや越冬斗争を担いあげてきた。——仲間の命は仲間で守る——仲間の祭りは仲間で作る

今年の夏祭りが、路上のセンパイ、仲間達の生きている証明であり、これからも寮から、路上から、「ダンボール村で、亡くなつた仲間の分、生き抜くぞ!」という証明だつたと思う。そして、私も、その決意を共にし、仲間の祭典を過ごした。

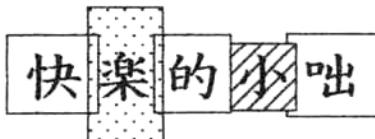
星 将隆



生きている証明、そして追悼

晴れわたった中央公園の青空の下で、第5回新宿夏祭りを迎えた。かなり暑い日だしとむし暑い中、みんな汗だくになつて、祭りを成功させた。夏祭りが終わつて、しばらくたつ。100人近くの仲間が、この日、路上から、そして寮から一同に集まつた。仲間のこれほどまでの熱気に、私が包まれたのは、本当に久しぶりだ。炊き出しの手伝いから、ゴミの片づけに至るまで、私がその日、関わつた作業のほとんどに、仲間たちの顔がある。

路上の仲間のセンパイ達に、どう関わつていつたらいいかわからなかつた頃、2年前、私が初めて参加した夏祭りの時、新宿の路上の仲間から、いろんなことを教わつた。——野宿で生きていくことはどういうことなのか—— 祭りの機材を、ダンボール村からアカーで、仲間と共に運んでいた時、お互いささえ合つて生きている新宿の仲間達が1つになつた時、ものすごい大きな力を生むのだと思つた。それは準備から片づけに至るまで、祭りをやりきり成功させたセンパイ達の団結力に示される。そしてこのことは、私を含めて「仲間と共に生きていきたい」そう決意させる根拠でもある。



その1

小汚な路上の、嗚呼哀しき競馬道

外れ馬券が舞う小汚ない路上が大好きである。新宿、後楽園、渋谷、浅草、錦糸町、新聞紙を敷いて階段にどっかりと座り込むおっちゃんの姿はどこの場所に行つても普通の光景だ。ここの路上はいつも哀愁がある。

みんななげなしの金で夢を追う。当たって、外れて、泣いて、笑って、熱中して、オケラ街道の一杯飲み屋、今日のレースはどうたらこうたら、首の差でオレの人生変つたのによ。逃げ切れずに悔やみ、追い込み切れずに悔やみ、はてまた落馬で悔やみと、なんか自分の事のよう、どうでもいい勝負の顛末を真っ赤な顔のおっちゃん達は喋り続ける。

ブリティキヤストが大逃げ打つて天皇賞を勝つたのはもう20数年も前の事。当時高校生の僕は府中の柵にしがみつきながら、彼女の逃走劇に声を荒げた。気がつくと、隣のおっちゃんも身を乗り出しての大聲援。「逃げろ！逃げろ！ぶっちぎりで逃げろ！」

後で聞いたら、このおっちゃん本命しか勝つてない。馬券は外したのに、満足そうに僕の肩を叩いて「いやー、すごかったな」と、大興奮の連発。

そんな、おかしな幸せを表現するおっちゃんの笑顔をまた見たくなり、僕は小汚ない路上を行き来する。

ダンボ太郎

* まあとにかく、ちゅうさんはマッサージしてくれる人大募集▽。

▽マーク書いといて。
はーい、分かりました。

そして翌日

* ちゅうさん、今日の調子はどうですか？
+ さああく、あー。

+ 背中？

* 胃が重いんだ、はああー。今日は最悪の体調だ。夕べ眠れなかつた
んだ。

Kさん

暑かつたからねー。

* うん、そう・・あーあ。なんかいい方法ねえのかなー。

何の方法？

* もつと体をいたわるように、体をいたわる方法。冗談じゃねえけど
刑務所入つてどうかなー。

でも、ちゅうさん悪いこと出来ないんじゃないの？

いやオレ？ わっかんねーな。

* ふーん。・ちゅうさん、今日は本集め（注）しないんですか？
うん、今日はもういいよ。この体調じやあ。

* ああ、そつか。

電車見ると田が回るんだよ。とてもじゃないけどムリ・・あーあ。

そつちは体大丈夫なのか、今のところ。

うん。

* 若いんだなー。あーおれも若くなりてえなー。

(注) 本集め：捨てられた雑誌などを集めて、路上の本屋に売る仕事。

ちゅうさんと会えば、手書きで作るときのあの鮮やかな包丁さばきが目に浮かぶ。すごく上手で、真似したくても私はとても真似できない。私はちゅうさんのすごい勢いで刻まれていくキヤベツや人参やタマネギを見ながら、のろのろと切っている。いつか弟子入りしようかなあ。

道

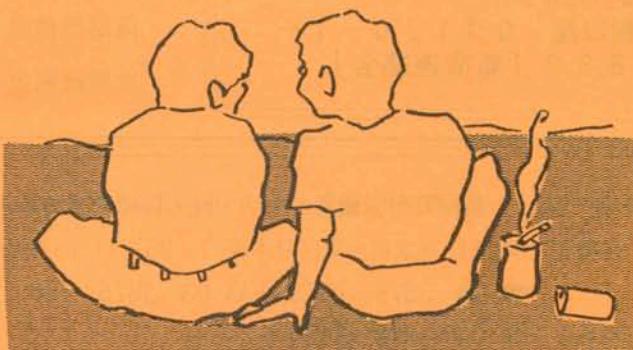
ばたの記

出口 万記子

ある暑い焼き出しの夜と、その翌日に

* ちゅうさん

+ 筆者



Mさん ちゅうさん最近背中痛いんだって。マッサージ大募集。

* そう。マッサージ大募集。彼女いらないけど、マッサージ大募集。

＊ 寝られないんだ、痛くて。

+ そななんだ、そんな痛いんだ。

Mさん ご飯も食べれないって。

+ 食べれない。

病院は行かないんですか？

行かない。においがいやなんだ。

+ * *

ふーん。

底

辺下層に
組み込まれた労働者がたどる
最下層の環流点

表紙

横倉かずみ

第5回夏祭り報告

星 将隆

おかだ ともこ

新宿写真館

笠井 和明

1

道ばたの記

快樂的小咄

ダンボ太郎

P11・14 イラスト
渡辺つむぎ

出口 万記子

13

12

11

7

会計報告

(98年6~7月期)

夏期カンパありがとうございました

夏期カンパの集中どうもありがとうございました。この厳しい時代にもかかわらず、多くの皆さんからのお志しには本当に頭が下がる思いです。おかげさまで財政も上向きかけ、越冬に向けてのとりあえずの段取りはなんとかなりそうです。皆さんの期待に応えるべく、仲間と共に今後も生き抜くたかいを進めてまいりたいと思います。引き続きのご支援宜しくお願ひします。

さて、通信会費は年5,000円となっております。今年分未納の方は是非とも振り込みを宜しくお願ひしたいと思います。また、通信会員の拡大にも協力していただけたらと思います。興味がある方がいたら是非紹介して下さい。通信もより一層の充実を計っていきたいと考えています (事務局一同)

カンパ送り先:

郵便振替口座 00170-1-
723682 「新宿連絡会」

収入	郵便振替カンパ	45口	502、875
	通信会員費	6口	30、000
	路上カンパ・通信売上		76、680
			609、555

支出	炊事関連費	107、785
	交通費	214、510
	印刷代	50、372
	コピー・DPE費	11、948
	文具・図書費	4、310
	発送費	32、200
	車両燃料費など	8、700
	電話代(5~6月)	22、573
	薬代	1、000
	会場費・使用料など	8、500
	雑費	2、452
	全都実分担金	55、125
		519、475

取 支	△ 90、080
前期繰越金	820、928
次期繰越金	911、008

編集・発行: 新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議(新宿連絡会)

連絡先: 111 東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉社会館 気付

☎ 03-3876-7073 FAX 03-3876-1869

現地: ☎ 030-818-3450